The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦前の在日大韓基督教会とバイブル・ウーマン : 民族教会の「オモニ信仰」との関連性を求めて
Author(s)	崔, 恩珠
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2010, 44, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6030
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

戦前の在日大韓基督教会とバイブル・ウーマン

―民族教会の「オモニ信仰」との関連性を求めて

崔　　恩　珠

1.　はじめに

歴史と伝統のある在日韓国人の宗教団体である在日大韓基督教会に注目するにあたり、その主な時代として設定するのは、1920年代後半から1934年の「在日本朝鮮基督教大会」創立にいたるまでの時期である。この時期において、教会は、朝鮮留学生を中心とした、いわゆる朝鮮のエリート層の民族的拠点[1)] から、生活の糧を求めて日本労働市場の底辺層に流入・定着せざるを得なかった労働者層の信仰共同体に変容していった。また、当時期は、カナダ長老教会から宣教師派遣と財政的支援をうけることによって、教会が大きく成長し組織化が可能になった時期として、今日の在日大韓基督教会の実質的基盤が整った時期でもある。したがって、当時期の教会の姿に対する考察から、今日の在日大韓基督教会の起源たるものを探り出す試みができると考えるのである。

在日韓国・朝鮮人の歴史と重なる在日大韓基督教会の一世紀におよぶ歴史は、当教会がその設立から今日にいたるまで、民族教会として存続することを可能にした基盤であり、民族教会としての誇りでもある。そこで、教会の誇る長い歴史と伝統として「オモニ信仰」という観念が教会の内部でみえない力を発揮してきたことは注目にあたいする。信仰の継承を特徴とする在日大韓基督教会の中で、信仰の先輩にあたるオモニ＝母親の信仰は、教会の歴史とその継承に関わるものである。在日韓国・朝鮮人という、

虐げられた民族にとって、唯一の救いであったはずの信仰を、守るべき遺産として残したのが、他でもない「我々のオモニたち」であったことは、大きな意味をもつであろう。民族教会を堅持するうえで、伝統と歴史を意味する信仰の先輩、つまり模範となるその信徒像が自分たちのオモニ＝母親であることの重みは、「オモニ信仰」の概念化を可能にした。また、民族教会のなかの女性問題を考える際にも、「オモニ信仰」に対する考察は不可欠である。

したがって本稿では、「在日本朝鮮基督教大会」の創立時期に教会のヒエラルキーの上層に位置していた、カナダ長老教会宣教師たちの報告書におけるバイブル・ウーマンの存在を浮き彫りにし、民族教会のオモニ信仰との関連性を探っていく。今日の女性伝道師であり、当時の教会内でも女性伝道師や婦人伝道師と呼ばれていたこの女性たちをあえてバイブル・ウーマンと表記するのは、カナダ宣教師たちを頂点に形成されていた当時の民族教会の状況を鮮明にするためであり、この考察が不可欠であると考えるからである。日常性からかけ離れた、西洋人男性牧師の視線によって再構成された民族教会とそのメタファーであるバイブル・ウーマンについて論じることによって、オモニ信仰の具体化を試みるのである。

2.　カナダ長老教会の在日宣教協力

1908年の朝鮮留学生たちの定期礼拝から始まった在日朝鮮人宣教は、YMCAとは別に東京教会を設立し、本国に牧師の派遣を要請している。その要請によって1909年10月、朝鮮イエス教長老会独老会の韓錫晋牧師が派遣されるようになった。韓牧師の3か月の滞在で組織を整えた在日教会は、1912年の朝鮮イエス教長老会と監理会による宣教合意によって、「朝鮮連合イエス教会」として、両教会から2年毎の交代で牧師派遣の協力をえられるようになる。

以後、1924年9月の朝鮮イエス教連合公議会（韓国基督教会協議会の前身）の発足により連合公議会に引き継がれた在日宣教は、1927年にカナダ長老教会の宣教協力決定によって本格化された。この決定によって、カナダ長老教会所属の宣教師ルーサー・リスガー・ヤング（L・L・Young）が22年間の朝鮮滞在を経て、神戸に派遣されることになる。ヤング宣教師は、1920年代以後の在日朝鮮人人口の急増とその中の女性の割合の増加のなかで[2)]、1893年の「宣教師公議会」における宣教政策[3)]に基づく宣教活動を行っていた。

その結果、1928年から1934年の間に、教会数と信者数ともに2倍近く急増し、「在日本朝鮮基督教会大会」創立の1934年には、日本全国で45の教会、2300名の信徒が確保される。ここで、在日教会の組織化を可能にした教会の成長の背景にある、朝鮮における宣教政策、在日朝鮮人労働者層の増加、女性人口の急増によるカナダ長老教会の「女性と子供」を視野に入れた宣教実践、そのための幼稚園と夜間学校の設立といった伝道方法とともに、このような成長の要因の一つとしてバイブル・ウーマンの存在があったことを指摘しておきたい。彼女たちはカナダ長老教会が在日朝鮮人宣教を決議した当初から、外国の宣教師とともにその出発点にいた朝鮮人クリスチャン女性であり、いわば在日宣教に欠かせない存在として選ばれた人材である。実際、ヤング宣教師の在日宣教は、3人の外国人宣教師と二人のバイブル・ウーマンの5人でスタートしていて、二人のバイブル・ウーマンに関しては、カナダ宣教部代表団が朝鮮を訪問した際に直接選出して日本に派遣させている[4)]。

彼女たちの重要な役割として、不安定な非定住者を対象とした在日宣教には欠かせないものとされた家庭訪問がある。非クリスチャンの朝鮮人の家を訪問し、福音を伝えることは、在日宣教においてもっとも必要で適切な伝道方式であった。当時、名古屋教会のバイブル・ウーマンであった沈

恩澤は次のように語っている。

> 私の名古屋時代は忙しい時代でした。明け方早く出掛けて、月が出る頃帰りました。訪問ですね。朴尚東牧師が「遠方の伝道講演」の日を決め、伝道にとっても忙しかったです。食事も取ることができないほどでした。（中略）牧師と伝道師たちの大変な伝道熱によって教会員たちもとても熱心でした[5)]。

また、ヤングも次のように家庭訪問の重要性を述べている。

> 私たちはノンクリスチャンとの出会いのために、彼らの関心事にさまざまな方法を用いて、集まりを持つようになることを決して怠らない。聖霊はこのような集まりを通して明確に自分の罪に気付かせてくださる。そんな動きの中で、朝鮮人の家々を訪問し、説教しながら伝道紙を配ることが最も難しいことであり、同時にもっとも効果的な伝道方法の一つである[6)]。

ヤング牧師の考える朝鮮人伝道における、最も効果的な伝道方法、つまり、家々を訪問し、伝道しながら伝道紙を配ることにおいて、その困難さをより容易にさせてくれる存在がバイブル・ウーマンであった。西洋人男性の牧師にかわって、同族の女性が、貧困と差別で苦しむ朝鮮人の家と心の扉を叩き、唯一の救いとしての福音を伝える役割、もしくはその架け橋となる姿は想像に難くない。当時の名古屋教会所属のバイブル・ウーマンの証言通り、訪問伝道は彼女たちの主な仕事であったと思われる。そして、こうした伝道方法こそが、以後在日大韓基督教会の起源とされる「家の教会[7)]」、すなわち、家から出発し、家を拠点とする、家族的教会であるゆ

えに民族的性格を鮮明にする、教会の重要な特徴と密接に関連している。

社会の底辺層を伝道の対象とし、女性と子供を視野に入れ、家を一軒ずつ訪問する伝道、幼稚園と夜間学校といった伝道政策、教会の自立と自治を究極の目標として在日教会の組織化を手助けしたカナダ長老教会の宣教協力、そのすべての面において、目にみえない存在としてバイブル・ウーマンはかかわっていた。彼女たちは教会内の職分として牧師の下に位置する伝道師のような働きをしていても、教会内で正当に評価され位置づけられた名称を得ることはできなかった。宣教開始から彼女たちの存在の重要性と必要性に関する自覚をもっていて、またたびたびその要請を訴えていたカナダ宣教師たちも、本国に送る報告書において、彼女たちを「(女性)伝道師」ではなく、バイブル・ウーマンという職分名で明記している[8)]。

3. バイブル・ウーマン（Bible Woman）

朝鮮において、バイブル・ウーマンは、欧米の宣教師による朝鮮宣教が始まって間もなく出現している。外国人宣教師は、その言語的障壁とともに、当時の内外法[9)]という厳格な男女分離の風習によって、朝鮮の女性たちへの宣教が不可能に近いことに気づいた。また、外部出入の制限されていた朝鮮の女性伝道のためには、伝道を手助けしてくれる同族の女性の存在がかならず必要であった。

つぎは当時朝鮮で活動していた外国人宣教師の証言である。

> 東邦のほとんどの国同様、朝鮮でも男と女が直接対面して言葉を交わすことはいい礼儀ではありません。したがって、年寄りの女性でないかぎり、土着伝道者が女性と直接あって伝道することはできません。それを無視して伝道することはキリスト教運動の害になります。そこで我々は、朝鮮での教会における女性の役割の重要性を知り、バ

イブル・ウーマンたちを最善を尽くして訓練させていて、同じ女性達に福音を宣べ伝えるように充分に武装させて派遣しています（訳―筆者）[10]。

内外法のもと、キリスト教運動の活性化のための必然的な必要性によって出現したのがバイブル・ウーマンであり、教会内での女性信徒の役割への自覚によって、彼女たちは訓練させられ、派遣されていたのである。この語りからバイブル・ウーマンの出現背景とその存在のもつ戦略性がうかがえるであろう。また、彼女たちの存在を長老教会とメソジスト教会は以下のようにとらえている。

元来、内外が明確な朝鮮で説教をするにあたり、抑圧されている女性たちに特別な関心をもった宣教師たちは、朝鮮の風習に見慣れない自分たちに言葉と風習を教え、巡回伝道を手助けしてくれる女性が必要であった。（中略）彼女たちはキリスト教による新しい生き方をする者として、他人を感化させ、新たな価値観を付与してくれる指導者としての初の職業女性であり、初の女性指導者であった（訳―筆者）[11]。

わが朝鮮では男女を区別する風習があるゆえ、我々が「伝道婦人」と称する彼女たちの犠牲的事業が偉大であると認めざるを得ません。近年になり風習は変化しつつあるものの、女性に伝道するのは女性の方が男性より適していて、すなわち伝道婦人の仕事の仕方は変更が可能ではあるが、伝道婦人は常に必要であると存じます（訳―筆者）[12]。

バイブル・ウーマンは朝鮮の言葉と風習に見慣れない外国人宣教師のために、そして内外法のもとのキリスト教運動における必然的な戦略として出現したのである。女性伝道のために、この職分の性別はかならず女であ

るべきであったが、このことは外国人宣教師の手助けという側面においても少なからず意味をもつ。

バイブル・ウーマンは、ハングルで「여전도인」（女伝道人）「전도부인」（伝道婦人）「부인전도사」（婦人伝道師）「여자전도사」（女子伝道師）と訳されている[13]。名称の多様さは、この職分が教会における女性の役割の重要性のゆえに徹底的に取り組まれたものであるにもかかわらず、確実な位置を確保することができなかったことを意味するであろう。キリスト教の万民平等と救済の教理が封建的体制と家父長制の下での被抑圧層、女性をはじめとする下層階級に「解放」の兆しをあたえたことは否定できない。しかし、その宣教とはきわめて帝国主義的性格を帯びていた。文明社会の視線で、未開社会をキリスト教理をもって開化させる形で展開された福音の伝播は、鎖国政策の朝鮮に門戸開放を迫った侵略的進出によって始まったのであり、その宣教活動もほぼ同じ文脈のなかにある。西洋の男性宣教師をその頂点におく、西洋・男性中心主義的な宣教活動のなかで、初の職業女性・初の女性指導者たる存在は、その性別ゆえに選ばれている。

つぎの文章からは、当時のバイブル・ウーマンの主な仕事の内容と、女であるゆえにかならず必要な存在とされた彼女たち自身の職分に対する自己認識を確かめることができるであろう。

> 子供の時から信仰生活をしていて、20年間女伝道人の責任を果たしてきました。女伝道人のあだ名が一つあります。雑巾です。病人のいる家ではお祈りをし、喪中の家では湯灌を行い、出産する家では助産婦、産婆となり、京城を囲んで3～40里離れた田舎教会に行き・・・・家庭におけるあらゆる生活、育児、聖書、読み書きを教え、婚家、喪家、悩みのある家をまわる責任が、雑巾と同様です。しかし、雑巾のない家はきれいではありません（訳―筆者）[14]。

バイブル・ウーマンに求められる仕事と自らの役割の位置づけは、「雑巾」というあだ名で表象されている。家庭にまつわる様々なことに「雑巾」のようにかかわり、それをもってキリスト教の伝道の手段とする彼女たちの職分に求められるものはなんだろうか。朝鮮におけるキリスト教の宣教初期から1945年まで1500名にのぼり、とくに1920年代からその数が急激に増加したバイブル・ウーマンの賃金は男性である牧師の20～30％にすぎなかった[15)]。実質的な女性指導者として韓国キリスト教史において重要な意味をもつその存在の意味と、雑巾のような働きをすることで伝道におけるもっとも重要かつ効率的な役割をはたしたバイブル・ウーマンの社会的評価が、必ずしも適切であったとはいいにくい。そうであるなら、このあだ名に収約されているように、彼女たちの主な仕事とその役割は、たとえば、先に引用したメソジスト教会の立場を語った文章に表れているように、「犠牲的事業」であるだろう。バイブル・ウーマンはそれを「雑巾」として自己認識し、しかし「雑巾のない家はきれいではない」と断言することで、この職分に求められる「犠牲」に自らの存在意義をみいだしている。

カナダ長老教会宣教部が在日朝鮮人宣教への参加を決議し、宣教師夫婦とともにすぐさま二人のバイブル・ウーマンを選抜し派遣させたのは、以上でみてきたように、朝鮮におけるバイブル・ウーマンの出現背景、主な仕事と役割、低賃金、社会的位置をも含めて、彼女たちの存在の必要性に対する自覚があったからであろう。伝道師ではなく、バイブル・ウーマンという名称で位置づけ、仕事の枠と制限を定め、職分の不安定さと低賃金にもかかわらず、彼女たちにしかできない、もっとも必要で重要な宣教の最末端の役割をはたさせたと解釈できる。

ヤング宣教師夫婦とともに、一番最初に派遣された二人のバイブル・

ウーマンは、平壌とソウルの聖書研究班（Bible Institute）[16] 出身である。1910年度の平壌聖書研究班の教科科目はつぎの通りである。

聖書	旧約聖書、イエスの生涯、ルカによる福音書、ヤコブの手紙、使徒言行録、出エジプト記、マタイによる福音書、ダニエル書、コリントの信徒への手紙1
理論・教理	聖書地理、教会史、監理教教理問答
その他	衛生、音楽、子女教育、算数、看護法、事務、料理[17]

「その他」と分類される教養科目のしめる割合は、全体の30％である。「その他」の教科科目における二分法的な性の役割分担は、しかし、バイブル・ウーマンの実務において、もっとも必要とするものでもあった。女性信徒を率いる指導者として、彼女たちはその見本になるべく、また同じ女性として求められる社会的かつ教会内での役割に忠実であるべきであった。いいかえれば、子女教育法や料理などのジェンダー労働が、当時の女性信徒はもちろん、バイブル・ウーマンにも期待され、要求されるものであり、このことは以下で述べるようなジェンダー的な権力構造を基礎とした教会内における秩序を意味するものである。

バイブル・ウーマンの重要な役割の一つとして、女性信徒の指導がある。そもそも彼女たちは、「女性と子供の間で働く人材[18]」として選ばれたのであり、在日宣教の核にある幼稚園と夜間学校の指導役としてその任務をはたし、活躍していた。また、女伝道会の結成も、バイブル・ウーマンの活動と関連づけられるであろう。1931年のカナダ宣教報告書において、ヤング牧師は、日本全国を7つの地区にわけ、簡単な説明をくわえている。ここで、幼稚園と夜間学校、日曜学校と並んで、「女性組織（Women's organization）に関する言及があるが、興味深いのは、こうした組織がバイブル・ウーマンのいる、九州、神戸、名古屋、大阪地区にのみ結成されていて、バイブル・ウーマンのいない、京都、東京、北海道地区にはなかったことである。ヤング牧師は、女性組織の結成がみられない京都地区にお

いて、「バイブル・ウーマンが必要である」としている[19)]。翌年、女性組織は、Women's societiesとして、在日教会教勢報告統計にくわえられている。また、1933年からは、Women's missionary societies、つまり、女伝道会として、その数が19に増え、またメンバーの数も412名になっている。今日の在日大韓基督教会の全国教会女性連合会がその起源とする「女伝道会」の結成であった。

バイブル・ウーマンが女伝道会の結成にどのようにかかわり、また女伝道会員たちとその活動に具体的にどのような影響を及ぼしていたかに関しては、定かな記録は残っていない。しかし、バイブル・ウーマンが教会で唯一かつ実質的な女性指導者であったことは、たしかである。そうであるなら、ここで女伝道会のみならず、全体の女性信徒と直接かかわることで、在日宣教の最前線で働いた、バイブル・ウーマンの存在の持つ意味を、教会全体を視野に入れて考えてみる必要があるだろう。まず、指摘すべきことは、この女性指導者たちが、キリスト教福音による女性解放の側面をもつにもかかわらず、当時の女性の社会的制約から自由な存在ではなかったことである。そもそもバイブル・ウーマンは、西洋人宣教師の補佐役として出現したのであり、その教育と社会的評価もまた、その補佐役としての限界を超えられないものにしていた。唯一の女性指導者たる存在のもつ、男性宣教師の「補佐役」としての限界は、ただちに教会のなかの女性信徒の置かれる限界と認識されざるをえない。

また、宣教師派遣と財政的支援をもって、在日朝鮮人宣教に加担したカナダ長老教会の宣教協力をうけて、在日教会は急成長をなし遂げることができた。しかし、宣教協力とその時期において形成された、教会内の権力関係の形成に対する問題意識が必要であろう。朝鮮をはじめとする、東洋諸国のキリスト教宣教における問題点としてあげられる、宣教の帝国主義的性格は、在日教会の場合、欧米の男性宣教師を頂点におく、教会内の階

層秩序形成によって、その問題点を明らかにしている。ここで重要なのが、バイブル・ウーマンの存在と彼女たちの位置づけである。外国人宣教師の補佐を本来の任務とするバイブル・ウーマン、つまり朝鮮人のクリスチャン女性を、朝鮮から在日宣教の場に連れ出すことは何を意味していたのだろうか。宣教師とバイブル・ウーマンのあいだの権力構造、つまり西洋人・男性・牧師と、その補佐役としての東洋人・女性・信徒のあいだのきわめて明確な上下関係の構築は、在日教会内での階層秩序の形成を容易にさせたのである。そして、バイブル・ウーマンは、西洋人男性宣教師と朝鮮人男性牧師、そして朝鮮人男性伝道師の次なる階層、つまり一般信徒をのぞいては、教会内の権力構造の最末端におかれたのである。

4. 在日大韓基督教会と「オモニ信仰」

在日大韓基督教会の女性信徒の集まりである、女伝道会は、結成以後、徐々に組織を拡大していき、1933年には日本全国で30の女伝道会があり、会員も651名になっている。女伝道会の結成と活動が、バイブル・ウーマンと幼稚園教師を財政的に支援するなどして、教会の経済的自立につながった点も記憶すべきであろう。そのなかで、1934年のカナダ長老教会月刊会報には、以下のような記述がみられる。

> 女伝道会は自ら進んで手伝っている。ある女伝道会では、全会員が自由献金以外にも毎食一さじに当たる米を捧げて、主日に持ち寄って販売したお金を女伝道会会計に渡している。これは米が十分ではない朝鮮人たちの真の犠牲である[20)]。

在日大韓基督教会で、戦後まで引き継がれた伝統である、「誠米（ソンミ）」の最初の記録である。戦後しばらくの間まで、各家庭でご飯を炊く前に一握り

の米を取って集め、教会に収めるといった、この献物法は継承されていた。家事労働の担当者であった女性が、自分たちの立場で可能な最善の方法で表した信仰の証であろう。外国人宣教師は、その米を、「朝鮮人の真の犠牲」であるとする。しかし、より正確にいえば、これは朝鮮人女性の犠牲である。

したがって、「誠米」は、在日大韓基督教会において、しばしば「オモニ信仰」と密接に結び付けられて語られてきた。信仰の継承を大きな特徴とし、ディアスポラ民族共同体の性格をもつ在日教会のなかで、母親の信仰、つまり「オモニ信仰」とは、苦難と逆境の歴史のなかで信仰一筋に生きた一世のオモニたちが表象する祖国と民族、背負ってきた差別と抑圧、模範となる信仰、これらすべてを包摂したコンセプトとなる。喪失の危機にある民族性と経済的困窮、民族的差別と抑圧を背負うからこそ、オモニ信仰はより崇高に称えられ、在日大韓基督教会の信仰の出発点と基礎とされた。過去の女性、つまり自分たちの母親を「オモニ」として表象することによって、オモニ信仰が教会内のジェンダー不均等の大きな機制となったのは当然であろう。誠米は、「オモニ信仰」に具体性を帯びさせる適切な例である。女性の信仰の証とされた誠米の精神は、外国人宣教師のいうように、まさしく自己犠牲なのである。

同時期に朝鮮でもみられるこの献物法である「誠米」が、朝鮮から来日したバイブル・ウーマンの影響であるとはかぎらない。しかし、彼女たちが在日教会の女性信徒の信仰的指導役であったことと、女伝道会の結成と活動に重要な役割をはたしたことから考えると、その関連性を否定することはできない。ここで、在日大韓基督教会が今日において信仰の先輩とその見本であるとする「オモニ信仰」の形成過程における、教会最初の女性指導者であったバイブル・ウーマンの存在のもつ意義をもういちど思いだす必要がある。たとえば、朝鮮キリスト教雑誌である『神学世界』1938

年5月号には、以下のような「女伝道師論」が展開されている。

> 女伝道師は、マリア的感化力をもって、少年、青年、壮年、老年は勿論のこと、宗教的貞操と人間の神に対する義務を心に吹き込む役割において必要である。（中略）優越感を捨て、傲慢心を捨て、ただ愛と謙遜と穏やかなる情緒を有する者にこそ、真の奉仕というものが分かるのである。男子に比べて女子の方が奉仕の線上に立つことを好む本質があると考えられるので、母性愛をもつ女が人民を救済し、キリスト教的奉仕をすることによって、教会はより早く拡張し、進歩するであろう[21)]。

女性を本質主義的にとらえるこの「女伝道師論」こそが、当時の朝鮮社会における男性牧師の視線を代弁している。西洋人宣教師の派遣から始まった朝鮮宣教と、その朝鮮を経由して形成された、また別の空間としての在日教会。異質でありつつも、その影響関係を無視することはできないとするならば、上記の文章と誠米の精神を結びつけて考えることもできよう。そもそも在日教会の誠米の伝統とは、朝鮮に由来している。上記の文章に基づいていうなら、自己犠牲とは、本質的に母性愛をもち、奉仕を好む女性が、聖母マリアのような感化力をもって実践すべきものであり、教会の拡張と進歩のためには、このような女性の主体的な自己犠牲と献身が不可欠要素となるのである。女性に対する自己犠牲の強要、もしくは女性自身の自己犠牲への自発性は、在日教会におけるバイブル・ウーマンの存在と、その階層的地位が示す制限と重なって構造化されていた。朝鮮人女性の真の自己犠牲である「誠米」は、その構造の産物であり、また在日大韓基督教会の「オモニ信仰」も、構造化された女性の犠牲精神を基礎に形成されたものである。

継承すべき信仰の遺産として、我々のオモニたちが、苦難と逆境のなかでみせた信仰、つまり「オモニ信仰」のもつ力は、そのオモニという言葉が連想させる「愛」、とりわけ女性の愛に起因する。より詳しくいえば、「オモニ」が我々に施してくれた無条件の「母性愛」とは、今日の我々を実質的かつ象徴的に支える、個人と教会の歴史であると同時に、民族の歴史をも意味する。また、これは、キリスト教信仰が究極的に目標とする、神と隣人に対する全人類的な愛に通じ合うゆえに、民族的信仰共同体の出発点と基礎としてもっとも適切な条件となることができた。ここで、オモニ信仰の象徴する、広範囲におよぶ愛の性格を、その形成時代と背景、具体的な形としての「誠米」をめぐる言説からさぐりだすことができよう。男性の助力者として、決して平等な権利を主張できない女という階層にとどまり、聖母マリアの感化力と本能的な母性愛を活かし、文字通りの献身によって教会を支える、その自発的な自己犠牲の精神こそが、「オモニ信仰」の核心にあるのではないだろうか。そうであるなら、オモニ信仰の表象する愛もまた、女性の自己犠牲の精神に他ならないであろう。

5. おわりに

戦後、在日大韓基督教会において女性の牧師按手が認められ、女性牧師と長老が誕生する1980年代まで、女性伝道師は女性信徒たちを率いる存在でありながら、同時に教会のジェンダー的秩序の限界として存続していた。戦前の女伝道会の伝統と精神を引き継ぐものとして、戦後、「婦人伝道会」が組織され今日にいたっている。認定まで20年も要した女性按手の認定は、婦人伝道会の忍耐強い活動の所産であった。そのなかで、在日大韓基督教会の「オモニ信仰」は、その婦人伝道会の成員たちがもっとも誇りとし、また継承の課題とする精神であるといえる。また、教会の民族的性格をより実感的かつ感覚的に認識させるメタファーであるゆえ、「オ

モニ信仰」は女性信徒のみならず教会全般において巨大な力を獲得している。異国の地で被差別者として生きる在日朝鮮人にとって、苦難と逆境の歴史を背負う「我々のオモニ」という言葉は、どのような響きを有するのだろうか。その響きゆえに民族教会の女性信徒にとって呪縛となる「オモニ信仰」の運命は、西洋人宣教師によってバイブル・ウーマンと名付けられた女性伝道師のそれと似通っている。

注

1）朝鮮からの留学生を主な信徒層としていた当時の教会では、本国の3・1独立運動の準備工作がおこなわれるなど、国権回復を目指し、その先頭に立つべき朝鮮のエリート層の独立運動の拠点としても活用されていた。 織田楢次『チゲックン－朝鮮・韓国人伝道の記録』日本基督教団出版社、1977年、129～130頁、参照。

2）1920年から1930年までの10年間、在日朝鮮人は約6倍にまで急増し、そのなかでも女性の人口増加が目立つようになる。1920年、日本全国で26,505名であった在日朝鮮人の非定住者数は、1925年には105,909名、1930年には158,628名に急増している。また、「（女一人に対する男の数値）男女比は、1920年に7.70であったものが、1925年に4.8、1930年に2.62と増加し、そのなかの単純労働者の割合は、89.16％、94.09％、93.26％である。「全国および主要道府県における在日朝鮮人人口中の非定住者数」（内務署警保局『朝鮮人概況』、『社会運動の状況』各年版）、「全国および主要道府県における在日朝鮮人人口中の非定住者数」（田村紀之「内務省警保局調査による朝鮮人人口」『経済と経済学』1981年2月～1982年7月）、「全国および主要道府県における在日朝鮮人の職業の構成比」外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究―形成・構造・変容』緑蔭書房、2004年、93頁、91頁、83～84頁、参照。

3）朝鮮における宣教政策は、1893年に「宣教師公議会」で公式的に樹立されている。その政策の内容とは、①伝道目標は勤労階級②母性は次世代に重要な影響を及ぼすゆえ、女性宣教と青少年教育を特別目的とする③キリスト教教育による朝鮮人教役者養成④教会の自立と自治を強調する⑤聖書中心のハングル文書活動による宣教⑥医療事業による宣教である。 Vinton, C, C (1893) Presbyterian Mission Work in Korea, “*The Missionary Review of The Work*”, JIX-9.p.671、백낙준『한국프로테스탄트기독교사』연대출판부、

1973년（ベクナクジュン『韓国プロテスタント・キリスト教史』延大出版部、1973年）212頁。

4）1929年度のカナダ長老教会朝鮮宣教報告書では、在日宣教初期の二人のバイブル・ウーマンに関して以下のような記録が見られる。「現在、この教会の有名な協会長であるStrachan女史が1927年10月に日本を訪問した際、彼女は日本にいる朝鮮人女性と子供たちに対する宣教が至急であると感じた。したがって、彼女は協会が即時、彼らのために、二人のバイブル・ウーマンを支援できるように措置をとったのである。我々は早速、調査をはじめ、やがて二人の有能な女性たちを見つけることができた。一人は朝鮮の長老教の中心地であるピョンヤン出身であり、もう一人は朝鮮の首都のソウル出身であった。」― "*The Act AND Proceedings Of The Fifty-Fifth General Assembly Of The Presbyterian Church in Canada*", 1929, p.60.

5）名古屋教会で1935年から1938年まで、バイブル・ウーマンとして働いていた沈恩澤氏の証言、日本基督教団中部地区愛知西地区靖国神社問題特設委員会編『愛知県下における「朝鮮基督教会」の歩み－戦時下を語る証言に聞く』在日大韓基督教会在日韓国人問題研究所（RAIK）、1998年、143頁。

6）『カナダ長老教会月刊会報（*The Glad Tidings*）』（1934年10月）、Wendy Chun「外国人宣教師の足跡」在日大韓基督教会関西地方会女性部主催『2006年度関西地方会女性部連続講座　宣教100周年に向けてのビジョン』17頁から再引用。

7）在日大韓基督教会が自らを「家の教会」として表象することに関しては、アメリカ・バプテスト教会の宣教師が語る以下のような記述が参考になると思われる。「朝鮮半島から日本へやってくる人々が、すべてキリスト教者ではない。しかし彼らのうち幾人かは、素晴らしいキリスト者であり、神の愛する僕たちである。彼らは静かに一つの社会に入っていく。そして、彼らに認められた貧しい場所を占める。彼らはなすべき仕事を熱心にやり、決してトラブルを起こさない。あなたがたは、ある朝目覚めて、二階が貸されていて、そこが一つの教会になっているのを発見するだろう。彼らは柔和であり、親しみ深い人々である。」宇治郷毅「戦時下の在日朝鮮人キリスト教運動」『福音と世界』1976年1月号、新教出版社、53頁、また、「家の教会」の具体的な内容に関しては、拙稿「民族教会、女性にとっても安らぎと救いの場であったか」大阪大学大学院文学研究科修士論文、2008年、第2章を参照されたい。

8）本稿における記述は、基本的にカナダ長老教会の宣教師たちが本国に送った朝鮮宣教報告書（*The Act AND Proceedings Of The Fifty-Fifth General*

Assembly Of The Presbyterian Church in Canada）（1925年～1945年）に基づいている。したがって、報告書の記述通り、バイブル・ウーマンという名称もそのまま用いているのである。だが、これは、カナダ長老教会の外国人宣教師という外部の視線で彼女たちや当時の教会を語るためでは決してなく、そうした帝国主義的な視線に対する批判的な意味を含めて当時の教会や女性の状況を浮き彫りにしようとする意図からであることを強調しておきたい。

9）女を内とし、男を外であるとする内外法は、単純な男女有別の観念から出発し、朝鮮時代には法律として定められていた。この法律によって、女性は家族と親戚以外の男性と対面したり、言葉を交わすことが厳格に禁止される。男女の接触そのものを、女性を内部、つまり家庭の中に閉じ込めることによって、社会的に制限しようとした措置であったとみなされる。

10）Annie Oakes, *Woman's in our mission station Korea*, OMS, Nov, 1915, p.8.

11）주선애『장로교여성사』대한예수장로교여전도회전국연합회（ジュソンエ『長老教女性史』大韓イエス長老教女伝道会全国連合会）、1978年、54頁。

12）『한국감리교회회보』1934년 10월（『メソジスト教会会報』、1934年10月）。

13）バイブル・ウーマンの名称は教団と時期によって異なる。例えば監理教会の場合、バイブル・ウーマンの名称は、1920年代には「女伝道人」、1930年代には「伝道婦人」、1940年代には「婦人伝道師」の名称が使われている。また、長老教会の場合、1905年から1929年までには、「女伝道人」の他に「婦人伝道人」「女子助師」、1930年以後は「女子伝道人」「女子伝道師」と記載している。聖公会は創立以後1945年まで「伝道婦人」としていた。

14）정마리아「최후의 승리까지」『기독신보』（鄭マリア「最後の勝利まで」『基督申報』）1930年1月1日。

15）この数値は基督教朝鮮メソジスト教の中・西部年会統計（1931～1932年）に基づくものである。バイブル・ウーマンの賃金にかんしては教団と地域、または時期によって担任牧師の2/3から1/12という格差があるが、平均的に20～30％であるとするのがもっとも一般的な見方であると考える。

16）バイブル・ウーマンの養成教育機関としては、1897年に米国監理教会によって組織された聖書班（Bible Class）と、それより体系的なものとして、1905年に平壌から始まった聖書研究班（Bible Institute）、より専門的な性格をもつ聖書学院（Bible Training School）がある。この中で、聖書研究班（Bible Institute）が、当時の最も一般的なバイブル・ウーマン養成機関であったと思われる。二人のバイブル・ウーマンの出身教育機関に関する記録は、“*The Act AND Proceedings Of The Fifty-Fifth General Assembly Of The*

Presbyterian Church in Canada", 1929, p.61.

17）Course of study and rules of admission of the pyengyang presby. *Woman's Bible Institute*, K.M.F, 1910.허연숙『초기감리교회전도부인의 활동과 역활1885-1935』숙명여대여성학전공석사논문（ホヨンシュク『初期監理教会伝道婦人の活動と役割、1885-1935』淑明女子大学大学院女性学専攻修士論文）2005年、53頁から再引用。

18）注4参照。

19）1931年のカナダ長老教会朝鮮宣教報告書では以下のような記録がある。「京都地区：一人の現地人が主日と平日奉仕をする三つのグループ、二ヶ所の子供主日学校と伝道会、一ヶ所の夜間学校を手伝っている。一人のバイブル・ウーマンが必要である。—"*The Act AND Proceedings Of The Fifty-Fifth General Assembly Of The Presbyterian Church in Canada*", 1931, p.52.

20）The Women's Missionary Society of the Presbyterian Church in Canada Toronto, *The Glad Tidings,* 1934, No, 7-8, p.269.Wendy Chun「外国人宣教師の足跡」在日大韓基督教会関西地方会女性部主催『2006年度関西地方会女性部連続講座　宣教100周年に向けてのビジョン』18～19頁から再引用。

21）『신학세계』1938년5월호（『神学世界』1938年5月号）。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

The Korean Christian Church in Japan and Bible Women before 1945 —searching for affinity between Omoni belief of the ethnic church

Eunju Choe

The Korean Christian church in Japan is a rich history that has been comprised and supported by Korean believers who have lived in Japan. This thesis is a part of overall views about this church and trying to find a view of this church before 1945 to origin of this church today.

In this thesis, Omoni belief that has exploited through its long history and used as a traditional methaphor by The Korean Christian Church in Japan, has become the medium of expression. In The Korean Christian Church in Japan, our mothers, who have lived through all their great troubles and still maintained their beliefs, have been based on this church.

Focusing on the church during 1920s and 1930s, I chose research method which is identifying the probability of connection between the "Bible Women", women leaders at that time and the holy rice which was concrete expression of believers.

In this thesis, the existence of Korean women believers who was called "Bible Women" by Canada presbyterian are an interesting theme, so I expect this theme will fully be able to preform view of the ethnic church today.

the holy rice : the way of votive offering that gathered each believer's house instead of the usual offering

キーワード：民族教会，オモニ信仰，バイブル・ウーマン，女伝道会，カナダ長老教会，誠米